

みやぎ地域・市民電力連絡会年会を開催

12月6日(日)午後、仙台市民活動サポートセンターでみやぎ地域・市民電力連絡会の年会が開かれ、61名参加。コロナ感染拡大の中入場制限されましたが、定員目一杯の参加でした。昨年12月発足の連絡会は宮城県内の4つの地域・市民発電所で構成され、県内の再生可能エネルギーの利用促進を図るため、県内の市民共同発電所や地域の電力関係団体との連携・協力を図ることを目的としています。年会の第一部は東北大学教授明日香氏による基調講演「コロナ禍からの世界のグリーン・リカバリー事情」。講演の要旨を紹介します。

明日香氏「再エネは環境と雇用の二つを実現する、省エネも大事」と

地球温暖化対策としてパリ協定では「産業革命以降の気温上昇を1.5℃以下に抑える」ことが世界各国の共通目標となりました。そのためにCO₂の排出量を年間7.6%、2030年までには45%削減し、2050年には排出ゼロが必要。この1.5℃の目標達成のためには先進国が途上国に比べ、目標よりさらにCO₂削減をしなければ、世界全体としての達成は困難。日本は2013年以降、年間2-3%のCO₂削減にとどまっています。EUその他の国のグリーン・リカバリー（GR）の最大のキーワードは「環境」と「雇用」。かつて、原発を推進してきた国際エネルギー機関（IEA）も、今では雇用創出とCO₂削減に最も寄与する電源は太陽光発電であること、原発はコストも高く、雇用創出の割合も低いと明言しています。EU、米国、中国、韓国のGRは地球温暖化対策と雇用創出がセットで、創出雇用の具体的な数値を示しています。各国のGRにおいて最優先課題が住宅や暖房における省エネです。この分野への投資の特徴は1)すぐにできること、2)すぐに効果が出ること。日本政府のGR政策はいまだ出されていません。日本のGR政策の一つとして講師明日香氏等は前回の参議院選挙で野党の共通エネルギー政策とすることをめざし、「原発ゼロエネルギー転換戦略」を提示しました。グリーン・リカバリー（GR）は環境と雇用の二兎を求めています。しかも再エネコストはどんどん低下しています。

第2部の県・市の再生エネルギー施策の発表は「出前講座」の一つとして実現しました。時間の関係で質疑応答の時間がとれず、県や市の再エネ政策の全体像を知ることができなかったことは残念です。今後、県・市の再エネ政策について意見交換する機会を持つ必要性を感じました。

第3部は連絡会構成4団体からの報告。「おながわ・市民共同発電所」は「原発に賛成の人も反対の人も」をモットーに活動しています。今回の女川原発2号機の再稼働をめぐることは理事の一人が再稼働推進の商工会会長でしたが、市民発電所の事業はともに協力して取り組んできました。また今年は15人に給付型奨学金を支給。しかし太陽光発電に出力制限装置設置を強いられたこと、また今年度からFIT認可要件として自家消費が義務付けられたことなど、市民発電事業に水を差す動きのなかで、「出島」の町有地に3号機建設の計画を進めているとの報告。みやぎ地域エネルギー合同会社はアイコブ倉庫に設置した自家消費型太陽光発電のノウハウを生かして、気仙沼の介護老人保健施設に太陽光+蓄電システムを2021年1月に完成予定。4つの団体の中で最も注目されたのがひっぼ電力発電所。これまでに13か所に発電所を設置し、年間発電量11万kWh、筆甫地域の240世帯の消費電力に相当するとのこと。発電収入の20%、20年間で1億円が地域に還元される予定。2035年までにひっぼ地域の60%以上の世帯がひっぼ電力の再エネを利用することを目指しているとのこと。このように山間部丸森町筆甫地区における、発電事業を基点とした地域循環型経済創出の新しい試みが注目されています。



このように山間部丸森町筆甫地区における、発電事業を基点とした地域循環型経済創出の新しい試みが注目されています。

松浦 真

脱原発仙台市民会議、再び仙台市と1月26日交渉へ 女川原発再稼働容認せず避難計画を見直せ

2020年はコロナ感染拡大の年となりました。そのコロナ禍の中、宮城県は女川原発2号機再稼働の地元合意を発表しました。発表直前の11月9日宮城県知事は市町村長会議を開催し、県内首長たちから合意を得ようとしたのですが、反対意見や慎重意見が出され、結局まとめることができず、後日石巻市長・女川町長の二人を集めて地元合意を導き出しました。このように強引に県知事が合意を導き出しても、コロナ禍での避難計画は宙に浮いたままです。特にUPZ圏内の被災者の半数を引き受ける仙台市の受け入れ態勢がどうなっているか、大きな問題です。

1月26日(火)午前10時から仙台市役所2階会議室で説明会予定

きらきら発電も加入する脱原発仙台市民会議は上記の問題について8月19日仙台市に要望書を提出しましたが、回答らしい回答が得られず、12月1日再度要望書を提出しました。その結果、1月26日(火)午前10時、仙台市役所2階会議室にて再回答の説明会が開かれることになりました。多くの市民が参加されることを期待します。

「おいで ふるさと米」 —小さな農家の営み—

仙台市太白区

佐藤 龍朗

化学肥料や除草剤、カメムシ防御のための殺虫剤などの農薬を使わない米の栽培をはじめ今年で3年目となります。アキアカネや蜘蛛などの田んぼの生き物たちが以前に比べて増えてきたように思えます。今年の品種は「ひとめぼれ」と糯米の「みやこがねもち」です。作付面積は約80ヘクタールです。肥料は米ぬか、油粕、魚粕を混ぜて発酵資材(EM菌)を入れて作った「ぼかし肥料」です。稲刈り後と春先に散布しています。土の中の細菌たちを元気にするためと、稲の成長を助けるための資材です。除草剤を使わない、我が家の田んぼは田植えの後から忙しくなります。米ぬか散布、酸素を必要とする雑草(コナギなど)の発芽を抑制する効果があるとのこと。そのあとは、自作のチェーン除草機、エンジン付きの機械除草機を引いてかき回し、除草します。それでも株間などに「雑草」が残ります。それは手取りで出来る限り取り除きます。「雑草」を抑えるには水の管理も大切です。水深を10cm~15cmに保つことで稗などの草が生えるのを防ぎます。今年は、稲の生育に影響を及ぼさない程度に「雑草」を抑えることができました。収穫量は通常栽培の6割程度でした。手間ひまがかかっても、収量が少なくとも、田んぼの生き物など自然環境への負荷をできるだけ少なくして、安心して食べられる美味しいお米を作りつづけていきたいと思っています。「おいで ふるさと米」は湧水や沢水に恵まれ、夏には蛍舞う、生出地域で育ちました。太白山のふもとで、田んぼの生き物たちや土手の草花に囲まれ、自然の中で働く喜びを感じつつ育てたお米です。2020年度新米、まだ少し在庫があります。よろしければぜひご賞味ください。

連絡先：仙台市太白区茂庭字町田 54、佐藤龍朗
090-3649-6977

*価格(送料別) 玄米 30Kg ひとめぼれ 10000円
みやこがねもち 12000円 精米(ひとめぼれ) 1kg
500円 5Kg2000円 10kg 4000円 (みやこがね
もち) 0.5kg 300円 5Kg2500円 10kg 5000円



きらきら発電市民共同発電所ニュース

2021年1月号 第71号

〒981-3215 仙台市泉区北中山3丁目17-12

電話・FAX 022(379)3777

HP kirakirahatuden.com/

Eメール hirohata3777@outlook.jp